紀行エッセイ
宮崎汎会員が見た世界
第１部映画編・第２話
映画「ローマの休日」の舞台

テレビがまだ普及していない時代の娯楽は映画であった。この時代、邦画、洋画を問わず実によく映画館に通ったがいつも館内は混みあっていた。何十年も経た今日でも鮮やかなに記憶に残っている作品がいくつもあるが、とりわけ１９５４年に封切られたグレゴリー・ペック、オードリー・ヘップバーン主演のローマの休日には衝撃を受けた。

ローマで買ったブロマイド・映画のワンシーン

二千年前の古代遺跡の数々が、大都会の街中にそのまま居座る現代都市など、木の文化日本にあっては想像を絶し異次元の世界を見る思いがしたものである。
みずみずしく爽やかな美しいオードリー・ヘプバーンに魅せられるより、街中に点在する古代遺跡に正直息をのんだ。
映画のスクリーンから伝わってくる世界の国々の自然や風俗習慣にも興味を掻き立てられたが、歴史や古代遺跡に、より一層強い魅力を覚えたものである。
多感な時代に見たローマの休日は、目をつぶると巨大建造物であるコロッセオやサンタンジェロ、ヴァチカンさらには街中に溢れる数多くの噴水のきらめき、堂々たる石造りの宮殿など、日本では決して目にすることがかなわない光景の数々が、今も鮮やかに蘇ってくる。
あれから半世紀が過ぎようとしている。仕事では何度もローマを訪れているが、いつもスケジュールが建て込み時間に追われ余裕の無い日々が常であった。年を経て仕事から解放され時間にゆとりができた。そこで思い切ってローマにアパートを借りて 1 か月くまなく古代都市をそのまま現代に残すローマ市内を歩いてみようと決心した。
ローマの街歩きは「ローマの休日」をなぞることから始まった。驚いたことに王女が一夜を明かした記者のアパートはスペイン広場の近く、ｖｉａ　Ｍａｒｇｕｔｔａ５１番地に実在し、映画のシーンそのままに今もアパートとして存在している。

オードリーが一夜を明かした記者のアパート

朝オードリーは階段を降り町中へ

記者のスクーターに乗って廻ったローマ市内にある遺跡や噴水は、無論変わることなくそのまま目の当たりにできる。

オードリーが有名なトレビの泉の傍で、長い髪の毛をバッサリ切った美容院は見当たらなかったし、夜サンタンジェロ近くのテベレ川岸に繋がれ、ダンスに興じ挙句には乱闘を演じた浮桟橋は映画の撮影から間もなく火事で焼失してしまい今はない。

王女一行が滞在した館はバルベリーニ宮であり、堂々たる建物である。現在は国立古典絵画館であり、ルネサンスの巨匠たちの絵画を数多く所蔵し展示している。

王女一行の宿舎となったバルベリーニ宮

トレビの泉

コロッセオ

ジェラードを舐めていたスペイン階段

サンタンジェロとテベレ川

真実の口

グレゴリー・ペックが真実の口に手を入れたシーンは、オードリーを驚かせとても微笑ましく印象に残る。真実の口は、サンタ・マリア・イン・コスメディン教会入口にある人の顔をもした石板で、かつては井戸か下水の蓋に使われていたのではないかといわれている。映画以来大人気となり口の中に手を突っ込んだポーズで記念撮影する観光客が長い行列を作っている。

記者会見場となったコロンナ宮

ラストシーンは王女が記者会見する場面で、グレゴリー・ペックの演じる記者と王女のオードリーの対面は感動的である。きらびやかな会場の一段高い円柱の間に立った王女は記者と相対するが、この記者会見した会場はローマの中心ヴェネツィア広場近くにあるコロンナ宮である。

入口は少々判り難いが 2 階へ上がるとすぐきらびやかな大広間に入る。ここが記者たちの並んだ会場で突き当りには太い円柱が 2 本あって高みになっている。その前には低い階段が 4, 5 段あり、映画では王女が階段を降り、記者一人一人に話しかけられるシーンである。会場は絵画で埋め尽くされ絢爛豪華な印象である。コロンナ宮は美術館として、現在土曜日の午前中だけ公開している。

余談ながら、会場の大理石の階段には、ちょうど砲丸のような鉄製の弾丸がめり込んでいる。市内にある高台、ジャニコロの丘からフランス軍が撃ち込んだ大砲の弾だそうだ。

ローマは永遠の都で誰にとっても忘れられない素敵な街である。　（２０１６年）